

令和5年12月27日

南の風 497

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

令和5年も残りわずかとなりました。今年も『南の風』をご愛読いただきありがとうございました。どうぞよいお年をお迎えください。前号の続きで、鈴木 良和氏の考えを書きます。

マナーにはルールのような罰則もチェック機能も必要ありません。ルールを破って罰を受けるのは誰でも嫌なものです。仲間が罰を受けるのを喜ぶ人もいないでしょう。理想の組織はルールではなく、マナーでうまくいくことが多いものです。

ここでウッデン氏がUCLAを伝説的なチームに育てる際に、「規律」についてどのように考えていたかがわかる印象的なエピソードを紹介したいと思います。

チームには「ヒゲを生やしてはいけない」というルールがありました。もちろん選手たちも納得したものです。ある年のシーズンオフが明けて、選手たちが顔を合わせました。するとチームのスター選手、ビル・ウォルトンがヒゲを生やしていたのです。ジョン・ウッデンは「そのヒゲはどうしたんだい」と聞きました。ビル・ウォルトンは「これは私の個人の尊厳であり、自由だ。1人の人間としてヒゲを生やすことは認められるべきだ」と答えたのです。

彼はチームにとって欠かせない選手ですから、チームを辞められたら困ります。かといってヒゲを生やすことはチームのルールに反します。彼を特別扱いしてヒゲを生やすことを認めたらチームの「規律」は守れません。コーチとしては大きな選択を迫られます。

ジョン・ウッデンは迷わず次のように言いました。「それは君の強い信念かい？ビル、私は自分の信じることを固く守る人物をたいへん尊敬している。けれども、このチームのメンバーたちは君がいなくなって淋しく思うだろうね」

ヒゲを生やすことが個人の自由だというビル・ウォルトンの主張は否定しません。しかしヒゲは禁止だというチームのルールに例外はないということを伝える絶妙な言い方です。それを聞いたビル・ウォルトンは黙ってヒゲを剃ったそうです。

ジョン・ウッデンは彼に迎合することはしませんでした。それよりもチームのルールを守ることを優先したのです。規律とはそこまで徹底して守るものなのです。

「規律」はチームの絶対的なルールで保たれます。しかしルールを守ることを目的化してはいけません。理念を強化すること、何かを伝えることが目的でそのためにルールが作られ、それを規律を持って守らせることでチームの理念が強化され、強い組織が作られるのです。

ところが、目的のためにルールをあえて破るべき場面もあるのです。柵の向こうに池があります。でも入り口に「入るな！危険」という立て札がありました。立ち去ろうとした瞬間、池でおぼれている子が見えました。この緊急事態でも入らないでしょうか「入るな！」の理由はおぼれる危険を避けるためです。目の前で子どもがおぼれているのだからルールはすでに意味を失っています。ならば今すぐ全力で助けなければならないのです。

実はバスケットボールにも同じような状況はあります。この続きは新年に紹介することにします。